

第一部 日本語教育実践研究 1

日本語教育実践研究 1 の概要

日本語教師養成プログラムには「日本語教育実践研究 1」「日本語教育実践研究 2」「日本語教育実践研究 3」の 3 種類の教育実習科目を設けています。「日本語教育実践研究 1」は、前期課程 1 年次の秋学期に実施され、「日本語教育実践研究 2」は前期課程 2 年次の春学期に実施されます。「日本語教育実践研究 3」はすでに日本国内の日本語教育現場で複数年間の教授経験を有している社会人等の学生が「日本語教育実践研究 2」に相当する内容の教育経験を有していると認められた場合、報告会やレポート等で認定を受けられるようになっています。

その中で、「日本語教育実践研究 1」は筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター (CEGLOC) に開設されている日本語クラスの中で、専任教員が担当するクラスにおいて実習を行っています。教育実習の内容は、秋学期 ABC モジュールを通して授業担当教員の指導のもとで 15 回の授業を参与観察しながら教育活動の補助、副教材開発、教壇実習等を行います。教壇実習のほか、クラスによっては副教材を作ったり、学習者の宿題をチェックしたり、語彙リストを作成したり、小テスト等のフィードバックを行ったり、学習者の取り出しクラスを担当する等、教育活動に関連する様々な活動を行います。実習の詳細の内容や教育活動はクラスのニーズや特徴に合わせて、授業担当者と実習生が相談して決めており、それぞれのプログラム履修者が特色のある実習を行っています。

「日本語教育実践研究 1」の特徴は、筑波大学のグローバルコミュニケーション教育センターで正規科目として開講されている日本語コースに教育実習生として参加し、コース運営全般を学ぶことにあり、本教師養成プログラムの特徴の一つでもあります。日本語教育に関する理論的な背景や知識については日本語教育原論等の専門科目で学んでいますが、実際の教育現場の多様性に触れることができる点で、実践的な日本語教育学を学ぶ貴重な科目であると言えます。国際日本研究専攻の研究力と日本語教育現場の実践力を結びつけられる科目として日本語実践研究の科目は大きな役割を果たしています。

本実践研究論文集に報告されている実践研究は平成 28 年度に CEGLOC で開設された授業で実践を行った内容です。国際日本研究専攻の日本語教育学学位プログラムに所属している学生をはじめ、同専攻の複合研究学位プログラムの学生、文芸言語専攻の学生、公共政策専攻の学生の合計 19 名の学生が日本語教師養成プログラムを履修し、実践研究を行いました。

本報告書の報告及び研究論文には、日本語教師養成プログラムで学んだ研究力と実践力が存分に盛り込まれている報告と論文が掲載されています。日本語教師養成プログラムを履修した学生が将来日本語教育の現場に携わることがあれば、本実践研究で培った経験を活かし、日本語教師として活躍してくれることを切に願っています。

平成 30 年 1 月 人文社会科学部国際日本研究専攻
日本語教師養成プログラムコーディネーター
許 明子

集中日本語コース A における実習報告

李 響

1. はじめに

本稿は、日本語教師養成プログラムの必修科目「日本語教育実践研究 1」において行った教育実習について報告を行う。実習では、1) 15 回の授業観察と観察レポートの提出、2) 3 回の教壇実習、3) 教科書『Situation Functional Japanese Drills and Notes』の L14、L15 における文法に関する確認問題の作成を行った。以下は実践概要、内容と反省点を述べる。

2. 実習概要

| | |
|-------|--|
| 担当教員 | 酒井たか子先生 |
| 実習期間 | 2016 年 10 月～2017 年 2 月 |
| 担当クラス | 集中日本語コース A 初・中級 |
| 学習者情報 | 受講者数：2 名 日本語学習歴：国で 2 ヶ月間程度 |
| 授業目標 | SFJ Vol. 1～3 の学習内容を理解し、さらに実際に使えるようになる。 |
| 教科書 | Situation Functional Japanese Vol. 1～3 |

3. 実習内容

3.1 授業観察

全 15 回の授業において主に以下のことに焦点を当て観察し、授業後に記録と気づいたことをレポートにまとめた。

教師側：1) 時間配分 2) 項目の導入方法 3) 学習者の間違いを訂正、および説明の仕方

学習者側：1) 指導を受ける際の学習者の反応 2) 間違いやすい項目 3) 前回より上達したところ

3.2 教壇実習

実習期間で全 3 回指導した。担当内容は以下の通りである。

| | 第 1 回 (11 月 08 日) | 第 2 回 (11 月 14 日) | 第 3 回 (11 月 21 日) |
|------|-------------------------------|----------------------------|---------------------------------|
| 実習時間 | 20 分 | 20 分 | 25 分 |
| 担当内容 | SFJ L9 SD⑨ p.10-11 原 因「ので」 | SFJ L10 SD③ p.32 代名詞「の」 | SFJ L11 SD③-⑤ p.54-56 条件「たら」 |

3.3 確認問題の作成

| | L14 (12月19日) | L15 (12月26日) |
|-----------|--|---|
| 該当文法・ポイント | 可能表現、授受表現 (～てあげる (さしあげる)、～てもらう (いただく)、～てくれる (くださる))、～にいく/くる、<time>まで/までに | ～てみる、～ておく、～てある、～ていく/くる、命令形、疑問詞+か/も、頻度を表す副詞、～中 (じゅう/ちゅう) |
| 練習問題 | 穴埋め、選択式、文を書く | 穴埋め、選択式、文を書く |

4. 反省点

4.1 教壇実習

1) 時間配分

三回目の実習は、準備した「たら」の教授内容が予定時間内に終わらなかった。「たら」の用法が多様であり、かつ学習者にとって決して簡単な学習項目とは言えないため、各用法を導入するには大量の時間がかかった。今後、授業を実施する際に、常に時間を確認し、練習を加えたり減らしたりする必要がある。場合によっては柔軟性も欠かせないということを実感した。

2) タスクの状況設定

タスクとして、学習者に文を作らせる練習を実施した。しかし、状況設定が多様で、練習も大量であったため、混乱を招いてしまった。初級学習者の場合は、要点をしっかりと把握させるため、状況をあまり広げず、ポイントとなる表現を幾つかに絞り、確実に練習させ、使わせるようにすると良かったと反省した。

4.2 確認問題の作成

まず、使用する語彙が難しいことと未習語彙の比率が高いことが反省点として挙げられる。また、未習語彙へのルビの付け忘れが何箇所にも見られたことや、学習者の漢字語彙の学習程度を確認しなかったために、難しい漢字が入ってしまったことなど、十分な配慮が必要だと気付いた。

次に、確認問題を作成する際に、学習者の文法項目の理解を深めるため、全ての項目を入れた複雑な課題を課したところ、学習者にとって負担が大きいということがわかった。

5. おわりに

実習を通して、学習者にとって、負担が少なく、ポイントを簡潔かつ効果的に理解させるためのタスクと言語運用に繋がるタスクを思案することの難しさを実感した。今後、今回の実習経験を教育現場に活かしたいと思う。

付記

実習にあたり、多くの御助言をくださった酒井たか子先生に感謝申し上げます。

補講日本語文法 6-2B における実習報告

肖 宇彤

1. はじめに

本稿は、筆者が本語教育研究コースの必修科目「日本語教育実践研究 I」として、2016 年度の秋学期に行なった文法の授業における教育実習の報告である。実習クラスの概要をまとめた上で、教壇実習の内容について詳細を報告し、その成果を報告する。

2. 実習概要

表 1 クラスの概要

| | |
|-------|-----------------------------|
| 担当コース | 補講日本語文法 6-2B |
| 担当教員 | 許明子 |
| 実習期間 | 2016 年度秋学期 |
| 学習者 | 18 人（多国籍） |
| 教材 | レベルアップ日本語文法・中級第 17 課～第 24 課 |

クラスでの具体的な実習内容は下の通りである。

- ① 毎回の授業を観察
- ② 毎回の小テストを採点し、誤用や非用などのフィードバック案を作り、授業でフィードバックを行う。
- ③ 1 回の教壇実習（実習の概要は表 2 に示す）

表 2 教壇実習の概要

| | |
|-------|---|
| 実習日時 | 2016 年 11 月 20 日 |
| 担当内容 | 補講日本語文法用教材『レベルアップ日本語文法』第 21 課 受身 |
| 使用教材 | レベルアップ日本語文法・中級 |
| 授業の目標 | ・受身文の意味を理解し、日常生活での使い方を身につける ・受身表現における視点の捉え方を理解する |

筆者は学生の受身における主語の選択と受動・能動の選択の使用状況を把握するため、中国人学生を対象に教壇実習を行う前と導入した後に 2 回のテストを行った。そのテストとは、日本語の受身文を中国語でどのように表現するかを書いてもらうものであった。

3. 教壇実習

3.1 教壇実習の準備

教壇実習では学生の承諾を得た上で録画し、ビデオの観察を通して授業の振り返りを行った。また、授業の流れを把握するために、事前に案を作り、担当教員の指導により修正し、教案を作った。

表3 授業の流れ

| 第 | 内容 |
|----|---|
| 21 | 挨拶 |
| 課 | 導入 〈スタート・トークの説明〉 ①受身の形の確認。②第一人称省略現象の補足説明。 |
| 受 | 受身文が含んでいる意味の説明 |
| 身 | 補足説明→受身の特徴 |
| | 練習説明 |

3.2 実習の反省

初めての教壇経験ではあるが、緊張しすぎることなく、授業を進めることができた。それは、学期の開始から小テストのフィードバックを行う等の活動を通して受講生との連帯感が取れていたためだと思われる。

しかし、授業を進めていくうえで時間配分がうまくいかず、教案通りに授業を進めることができなかった。準備していた例を取り上げることができず、一部は積み残しとなってしまった。また、教案を立てて十分な準備をしたとしても、授業の中では様々な理由から計画通りには進まないこともあることが分かった。授業中に受講生の反応や理解な程度を確認しながら、受講生を中心に授業内容を調整する能力も重要であると考え。今回の実習では、学生の反応に応じて授業内容を調整することは十分にできなかった。例えば、受身文の視点という概念を説明した時、中国人の受講生が多かったため、中国語との比較を通して視点の違いについて説明を行った。しかし、他の国からの受講生も数人行ったので、説明は簡潔に行う等の工夫が必要だったと考える。受講生の母語との比較を通して日本語の特徴を考えることは学習にプラスになることもあると思われるが、一部の受講生だけが対象になるような説明の仕方にならないように注意を払う必要があると考える。

4. 終わりに

今回の実習を通して、自分の教え方を見直すことができ、中級中国人学習者の受身文の使用意識についても分析を行うことができた。また、担当教員の丁寧な指導や意見をいただいたおかげで、日本語教師としての姿勢やこれからの改善点も明らかになった。今後も教師の視点で、日本語の文法について研究していきたいと考える。

補講日本語 5 話す-1B における実習報告

彭 祐祥

1. はじめに

本稿は、筑波大学大学院人文社会科学研究科における国際日本研究専攻日本語教育学学位プログラムで実施した「日本語教育実践研究 1」の報告である。筆者は「補講日本語 5 話す-1B」クラスの教壇実習を 2 回行い、日常生活で使われる日本語をテーマとして、ロールプレイの指導を行った。

2. クラス概要

授業の目的は、受講生の日本語会話力を向上させ、相手がわかるように自分の経験や知っている出来事について話すことである。

| | |
|-------|---|
| 担当クラス | 補講日本語 5 話す-1B |
| 担当教員 | ブッシュネル・ケード |
| 実習期間 | 2016/10/05-2016/12/21 計 10 回 (1 回 75 分) |
| 教科書 | WEEKLY J book1 ー日本語で話す 6 週間ー |
| 教壇実習 | 2 回 (10/26、11/28) |

3. 教壇実習

3.1 授業内容

「補講日本語 5 話す」は合計 10 回であったが、その中から筆者は 2 回担当し、2 回ロールプレイの教壇実習を行った。原則的にロールプレイのテーマはこれまでの授業で取り上げられた内容を基礎に考案されたものである。

1 回目のロールプレイは、「トラブルを解決する力・苦情を言う力」を学習目標とし、「ATM を使う際のトラブル」と「チューターが話を聞いてくれない状況」という場面設定を基に実施した。2 回目のロールプレイは、「ある地方の様々な特徴を述べることにより、描写・説明する能力」「買い物をする際にあらゆる状況に対応する能力」を学習目標とし、「友だちを旅行に誘う」と「新幹線の切符を買う」という場面設定を基に実施した。

3.2 授業の進行

ロールプレイに入る前に、10 分ほどの導入会話を行った。1 回目は「チューターが話を聞いてくれないなどのトラブルに遭遇したことがあるか」を話題に導入会話を行い、2 回目「友だちを旅行に誘う」のロールプレイの前では「旅行に行きたいところがありますか」「なぜ行きたいですか」「どこから聞いた情報ですか」などの質問を用い、受講生の興味を引きながら、ロールプレイに役立つ情報を導入した。

次に、ロールプレイの SCRIPT を受講生自身にグループで考えてもらい、クラス全員の前で披露し

てもらった。最初の教壇実習では、筆者はスクリプトの作成手順を受講生に特に提示しなかったため、ロールプレイを実施中にスクリプトを読み上げてしまった受講生もいた。そこで担当教員の指示の下、2回目の授業では予めスクリプト作成手順を予め示し、読み上げずにロールプレイを行うようにした結果、スムーズに授業が展開された。そしてロールプレイ活動後、各グループの評価を行い、教壇実習を終了した。

3.3 反省点

1回目の教壇実習終了後に、担当教員から以下の内容のフィードバックが得られた。

- 1 全体的に早口で、落ち着かない話し方をしていると感じられた
- 2 受講生からのすぐに反応を求めようとしていた（受講生の反応を待たない）
- 3 配布資料をしっかりと確認できていなかった
- 4 受講生の自主性に任せすぎていて、やり取りが足りていない
- 5 スクリプトの作成手順を提示していない

以上の問題点は、教案をより厳密に作成し、学習者に対して筆者が行うコメントを予め考えておくことによって、2回目の授業では大部分を改善することができた。しかし、授業中の様子が撮られた動画を確認したところ、落ち着かない話し方という点についてほとんど改善されていないということが明らかとなった。このような話し方は、自信がないように見えるだけでなく、受講生にとって聞き取りづらいものであった可能性が高いため、今後引き続き行う予定の実践研究や実際の教育現場で注意すべき点として改善に取り組んでいきたい。

4. 終わりに

筆者はこの教壇実習によって、初めて日本語教師として学習者に日本語を指導するという経験をすることができた。未熟な点が多々あったが、指導教員であるブッシュネル・ケード先生の指導により、本実習を完了させることができた。この経験を今後の日本語指導に活かすことができれば幸いである。

補講日本語読む 6-2B における実習報告

古 君瑠

1. はじめに

本稿は、人文社会科学研究科国際日本研究専攻における日本語教育学学位プログラムの必修科目「日本語教育実践研究 1」の一環として、2016 年度秋学期に「補講日本語読む 6」クラスにおいて行なった実習の報告である。以下において、実習の概要と内容を記述し、感想と反省を述べていく。

2. 授業の概要と流れ

2.1 授業の概要

表 1 「補講日本語 6-2B 読む」クラスの概要

| | |
|-------|---|
| 担当教員 | 加納千恵子 先生 |
| 実習期間 | 2016 年秋学期 10/4~12/21 火曜日 3 限 |
| 教材 | ①読解の文章：プリント配布 ②ストラテジー練習：石黒圭 (2011) 『留学生のための 読解トレーニング～読む力がアップする 15 のポイント～』よりプリント配布 |
| 授業目標 | ①読むことを楽しむ。 ②意見文、論理的な文章、エッセイ、小説など、様々なジャンルの文章を読み、文体の違いや、文章構造の違いに注目する。 ③内容を正しく理解する。 ④文型・慣用句・表現・語彙を学ぶ。 ⑤読んだことを自分の言葉で言い換えたり、まとめたりする。意見・感想を述べ、他の学生と交換し合う。 |
| 学習者情報 | 12 名 (漢字圏 10 名 非漢字圏 2 名) |

2.2 授業の流れ

授業は主として、「ストラテジー練習」と「文章読解」からなり、流れは以下のとおりである。

- ① 出席を確認し、宿題を提出させる。
- ② ストラテジー練習を実施する。文章を音読させ、質問に答えさせながら、語彙・表現・文法を説明し、内容理解を確認し、ストラテジー練習の要点と狙いをまとめる。
- ③ 「読む前に」に触れ、「読みましょう」の文章と質問用紙を配布し、文章を読解させる（読み始めと読み終わりの時刻を記入させ、時間を測る）。
- ④ 文章を音読させ、内容理解を確認し、難しそうな語彙・表現・文型・慣用句を説明し、質問に答えさせる。必要なところで、日本文化や日本人の発想を紹介し、学習者の意見を聞く。

3. 実習の内容

表2 実習の内容

| | |
|-------|---|
| 教壇実習 | 2016年11月22日 火曜日 3限(75分) |
| 担当内容 | ストラテジー練習(6) 前件と後件の関係をつかむ 文章(5) ラナルド・マクドナルドと森山栄之助 |
| 実習の流れ | 2. 2の授業の流れに従う。 |
| 実習の概要 | 教壇実習以外に、9回の授業に参加し、出席の確認、宿題の配布と下採点、資料のコピー、配布を行う。 |

4. 実習の感想と反省

4.1 意味の説明

読む授業では、学習者の内容理解の能力を高めるばかりでなく、それにつながる文型・慣用句・表現・語彙を教えることも重要な項目になる。例えば、新しい語彙が出てきたら、易しい言葉で言い換える、例を挙げる、他のものと比較して説明する、類義語と反対語を挙げる、例文を示す、ジェスチャーや図で示すなどといった様々な手法がある。いかに学習者にわかりやすく、印象に残るようにするか、説明の工夫が必要になる。

4.2 フィードバック

宿題を下採点する段階で、書き間違えた漢字、文法の間違い、語用論的な間違いを見抜けなかったところが反省すべき点である。文全体や構造などを直しすぎると学習者は自分がどこを間違ったかを理解できないかもしれないが、日本語らしい日本語に修正した方が学習者のためになると考えられる。部分的な間違いを直した上で横に日本語らしい表現も付け加えるのが最も効果的なのではないだろうか。

4.3 日本文化・日本人の発想の導入

読む授業では、日本語の語彙・文法・表現を教え、日本語での理解能力を高めさせる以外に、文章を通して、日本文化・日本人の発想を紹介して、さらに、学習者自身の国の文化を紹介してもらうことも重要な部分になる。読む授業で、日本文化・日本人の発想を紹介するには、二つの形で行うことが考えられる。一つ目は、文章の前か後に小さい話題を提供し、その話題について考えさせて、ディスカッションさせたり、紹介したりすることである。もう一つは、文章で教える間に、小さい話題や物事を取り上げて、日本的な考え方や日本文化を紹介することである。授業を見学した時は、「読む前に」の材料で日本文化を提供した以外に、「セクハラ」のような一つの単語を取り上げ、これに関連する「パラサイトシングル」などの単語も取り上げて、日本人の価値観を説明していた。自分が教壇実習の時には予習の材料を使って当時の日本の歴史背景を紹介したが、授業中には日本文化を導入する余裕がなかった。

5. 終わりに

今回の「補講日本語読む6-2B」クラスにおける実習は日本で中級レベルの学習者を対象に、1コマの読む授業を日本語で実施する初めての経験であった。読む授業がどのような目的として何を教える項目としてどう教えるかがわかり、実践を通して教師としての不足点にも気づく良い機会となった。

補講日本語書く-8B における実習報告

楊 雅

1. はじめに

本稿では、日本語教育研究コースの必修科目「日本語教育実践研究Ⅰ」において、筆者が筑波大学 CEGLOC で実施された留学生を対象とする上級のクラス「補講日本語書く-8B」（指導教員：木戸光子）で行った教育実習について報告する。

2. 実習概要

| | |
|-------|---|
| 授業の目的 | 3000 字程度の論理的なレポートが書ける |
| 教科書 | 『大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編、アルク、2002 年 |
| 授業概要 | 2016 年 10 月 6 日から 12 月 22 日まで毎週木曜日、全 10 回（個別指導含む）。参加学生は 7 名程度であった。 授業は主に以下の流れで進められた。 1 要約作成：15 分間で新聞記事の内容を要約する。 2 要約のフィードバック：前回の授業で作成した要約文へのフィードバック 3 教科書の内容について説明：前回の授業で説明した内容の宿題の答え合わせと新たな内容の説明 4 作文のフィードバック：事前に提出された宿題へのフィードバック 5 グループワーク：グループ（2-3 名）に分かれて、③をお互いに見せ合い、意見を言い合う。 |
| 実習内容 | 要約の部分を二週にわたって担当した。第一週は①要約の内容や要約のポイントについて簡単に説明する。第二週は②要約のフィードバックを行った。担当する課以外の授業では、資料の準備や授業の補佐をしながら、授業を見学した。 |

3. 実習での取り組み 1：授業見学

3.1 学習者に気づかせることの重要性

最初の授業にレベルチェック作文練習を行った。次回の授業で学生たちに自分の作文と模範作文の比較をさせることを通して、自分の作文における構成上の問題点や表現の問題などの不足したところに気づかせることができた。これは学習者にとって自ら自分の不足点を意識させることが作文力の向上に重要なポイントだと言える。また、受講生の書いた要約文、作文がよく書けているものをピックアップし、フィードバックプリントとして配ることも学習者に学習すべきところを気付かせる仕組みだと考えられる。

3.2 個別指導の大切さ

本授業は受講生の人数が少ないため、学生に対する個別指導が多くある。要約、作文へのフィードバックは毎回教師から一人一人その問題点を指摘し、改善すべきところを説明することがある。それによって、学生たちの個別性を配慮しながら、授業を行い、よりよい授業になった。

3.3 グループワークの活用

グループ活動を行う時、学生の国籍に偏りがないように配慮し、学生が母語で会話する場面を回避した。また、あまり自分の意見を言わない人があり、沈黙する場合がある。これに対し、教師がピアレスポンスを用意し、ピア活動についてきちんと説明し、学生が積極的にピア活動に参加できるように努力した。

4. 実習での取り組み2：教壇実習

二週にわたって教壇実習を行った。指導教員および学生からの指摘をもとに、反省点をまとめた。以下の通りである。

- 1 要約のフィードバックの説明に夢中になり、後に来る学生に資料を配ることを忘れてしまったことと、例文を読んでいるうちに、それに集中して学生のことをあまり見なかったことを反省している。教師として、いつも学生の行動を注意しなければならない。それを注意しながら授業の調整もそれに応じて変えることもあるため、最も重要などころだと言える。今後、この方面から努力しなければならない。
- 2 緊張しすぎて説明する時、言葉が震えていてはっきり話していない時もある。学生がきちんと説明を聞き取れるため、緊張しても話のスピードを下ろし、説明をはっきりしなければならない。これからそのような練習が必要である。
- 3 学生からフィードバックの例をすべて読んで、話が長くなり、ポイントのところだけを強調してもらいたかったというコメントがあった。それについても反省している。三つの例文の全文をすべて読むのは時間がかかる。ポイントの部分だけを説明した方がもっと聞きやすくなる。
- 4 板書の問題について、学生が見やすく、わかりやすい書き方をしなければならない。また、書いただけでは足りなく、板書の位置なども配慮すべきである。学生の立場に立って板書をきちんと書かなければならない。

5. おわりに

今回の実習を通し、基本的な授業の流れから、教案作り、板書の書き方、作文の指導法、グループ活動の運用法まで、授業を行う技術を見学し、体験した。このクラスの学生の日本語のレベルが高いため、あまり言葉遣いや話すスピードに注意しなかったことを反省し、教師として授業中で常に学生の様子を見ながら指導を進める必要性を認識した。今後の実践で反省を生かし、よりよい授業を行いたいと思う。

補講漢字 4-2B における実践報告

原 将吾

1. はじめに

本稿は筑波大学大学院人文社会科学系国際日本研究専攻日本語教育学学位プログラムの開講科目「日本語教育実践研究 1」で行った教壇実習の報告と反省である。

2. 実習概要

| | |
|--------|---|
| 授業担当教員 | 加納千恵子先生 |
| 実習授業 | 補講漢字 4-2B |
| 実習期間 | 平成 28 年 10 月 5 日～12 月 21 日（全 10 回） |
| 教材 | 『Basic Kanji Book vol. 2』 36 課～45 課 |
| 受講生 | 受講登録者数は 22 名、その内漢字圏出身者は 10 名、非漢字圏出身者は 12 名であった。 |

3. 授業の内容

筆者が教壇実習を行ったのは 11 月 28 日実施の第 7 回、使用教材の 42 課を扱う回である。授業時間は 75 分、そのうち前回の復習にあたるクイズを行う 15 分を除いた 60 分で実習を行った。

授業の流れは以下のとおりである。まず、教科書の導入ページにある語彙を解説した。ここでは語彙を解説しながら、図 1 のような、土台の上に学習を積み上げた結果が卒業となるイメージ

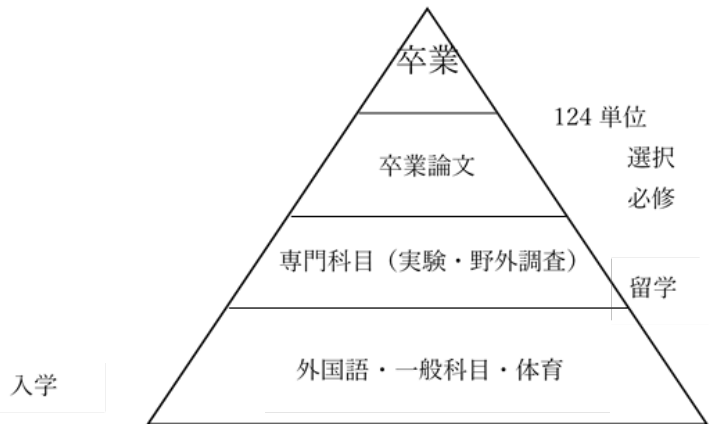


図 1 筆者作図の板書用図

図を改めて白板に描いて示した。その後本課で扱う漢字を板書して書き順を示し、書き練習シートに記入を始めるよう指示した。学生が書き練習シートに取り組む間、担当教員と筆者の二人で机間指導に当たった。早く終わらせた学生から順に作文問題の担当を割り振り、学生が作った文を白板に書かせた。書き練習が終わった段階で、教科書の読み練習を行った。学生一人を指名して、一文ずつ音読をさせた。その際には適宜訂正を行った。そのまま白板の学生作文も音読させ、その後音読と作文の双方に必要に応じてフィードバックを行った。最後に配布していた読み練習シートのペアリーディングをさせたが、

これは時間不足のため一部だけにとどめた。

4. 実習の成果と反省

本実習で筆者が主に取り組んだことはほぼ毎回行うクイズと各回の宿題に対するフィードバックである。それに加えて、教壇実習における筆者独自の活動として、語彙説明の折に教科書の図を新たに白板に書き直したことと、本課で扱う漢字を筆者自身が板書して見せたことの2点である。以下にそれぞれについての筆者の意図したことと、その工夫の成果について述べる。

4.1 図の描き直し

この工夫について筆者が意図したことは、導入ページの語彙の整理と、より分かりやすい図示である。使用教材では上から下に時間が流れるような描き方がなされていたが、筆者はそれよりも下から上に積み上げて卒業を目指す、という示し方のほうが学習者にとって分かりやすいと考えた。受講生はみなすでに大学での学びのあり方を知っているわけであるから、ある程度共通の理解を期待してのことであった。実際に、教壇からは学生たちが頷きながら話を聞くのが観察された。このような工夫が効果的であったためなのかは分からないが、この課の宿題では、導入で扱った語彙についてはよく理解されている様子であった。

4.2 書き順の提示

これはそれまでの課の宿題などを観察して、中国出身の学生が簡体字に惑わされている様子や、非漢字圏出身者が複雑な字形につまずいている様子が見られたことへのフィードバックとして考えたものである。実際に指導者が書いているところを見せることで書き方のコツを知ってもらうことが狙いで、それまでも机間指導で行っていたことを全体に対して行ったものと言うことができるものである。これに関しては残念ながら、反省すべき点が目立つものとなった。筆者は全ての受講生から見えるよう、立ち位置を変えて2回ずつ板書をしてみせたのだが、それが想定よりも時間を要してしまった。この失敗を回復することが出来ず、その結果読み練習シートのペアリーディングをする時間がなくなってしまった。翌週行ったこの課のクイズは、この授業を通して最も平均点が高かった回となったため、この一点が非常に心残りである。

5. 終わりに

本実習では学習者へのフィードバックという観点から、「いつもの授業」に2点だけ追加した教壇実習を行った。1点目は大学で学ぶ学生であるということを踏まえて、2点目はこれまでの学習活動で見られたつまずきを踏まえて、それぞれ行った工夫である。それが功を奏したのか、はたまた授業者が異なったことで受講生の注意を引くことができたただけなのか、この課の宿題とクイズはどちらも通常より平均点が高く、よく理解できている様子であることが見て取れた。このことは筆者にとって喜びであると共に、これに慢心せず今後も研鑽に励みたいと思わせるものであった。

補講日本語1ベーシックBにおける実習報告

帖佐 光江子

1. はじめに

本稿は、筑波大学「日本語教師養成プログラム」の必修科目「日本語教育実践研究1」において行った日本語教育実習についての報告である。

2. クラスの概要

表1 担当クラスの概要

| | |
|----------------|---|
| 授業名 | 補講日本語1ベーシックB |
| 指導教員 | 関崎博紀 吉田麻子 |
| 開講期間 及び授業時間 | 2016年度秋学期 火曜・木曜 13:45-15:00 (10週間計20コマ) |
| 受講者 | 人数：9名（中国、イラン、インドネシア、イラン、オランダ、ガーナ、フランス、ミャンマー） 大学院での研究を目的に来日している博士前期、または後期課程の留学生で、日本語の学習経験はほぼない。 |
| 授業での目標 | ・ひらがな、カタカナが読み書きできるようになること ・日常生活の基本的なことを基本的な日本語を使ってできるようになること |
| 授業構成 | ひらがな・カタカナの読み練習と、日本で生活するにあたり、遭遇することが多いであろう場面（例：飲食店での注文）でよく使われる日本語文法の指導。 |
| 使用教材 | ワークシート |
| 授業評価 | 出席40% 期末テスト60% |

3. 教壇実習の概要

表2 教壇実習概要

| | 1回目 | 2回目 |
|------|---------------------------|---------------------------|
| 実地日 | 2016年11月22日 | 2016年12月13日 |
| 授業内容 | ひらがな・カタカナ読み書き Vました・Vます | ひらがな・カタカナ読み書き ～したいんですが |

教壇実習は2回行った。その概要は表2の通りである。学習者の状況を考慮し、いずれの授業でも目標は、学習する文法の使い方を学び、日常生活において使えるようになること、とした。例えば、カタ

カナの読みは、実生活ですぐ使えるよう、カフェのメニューを使って練習した。また、日常生活の場面で、日本語を使ったコミュニケーションができるように、頻繁に使われる文法をとりあげ、実際の場での会話を用いた練習問題やロールプレイング等を行った。知っている語彙も多くないため、よく使われる動詞や名詞の確認もはさみ、最終的には、自分、また周りの人、物、状況について説明するために、その学習した文法を使うアクティビティを加えた。

4. 実習を振り返っての考察

日本語に触れる機会が少ないであろう学習者の状況を考慮し、日本で生活するに困らない程度の日本語力に焦点をあてて実習を行った。この実習を振り返り、日本で生活するに困らない能力、サバイバル日本語について考察すると共に、これから初めて日本語を学んでいく学習者に対しての日本語教育のアプローチを考察する。

サバイバル日本語の明確な定義はないが、日常生活の中で頻繁に使うことができるフレーズを指すであろう。例えば、生活に不可欠な活動である買い物での、「〇〇ください」「いくらですか」などである。最低限の線引きが難しく、定義が難しいが、授業で学びたい内容を受講生に問いかけたところ、買い物での会話や簡単なあいさつとの声が確認できた。このことから、人と簡単なコミュニケーションをとる会話や買い物の際に使われるフレーズが重要視されていることがわかった。ここにサバイバル日本語の要素がみてとれる。

初級レベルの学習者に対する言語教育のアプローチとしては、語彙の意味確認では、絵などの視覚的なものが役に立つと感じた。イラストの解釈は、語彙の意味のみに集中させるため、シンプルな絵を選択する必要があることを学んだ。例えば、「テレビをみる」ことを表す絵では、テレビとテレビを見ている人が描かれている絵を選択する。テレビを見ている人が座っていたり、何か食べたり飲んだりしていれば、学習者の視点がその行為にあてられてしまうからだ。

今回、授業は、扱う文法のイントロダクションに始まり、普段頻繁に日常生活で使うであろう語彙(特に動詞)を取り上げ、その動詞の活用の練習をはさんだ。そしてパターンプラクティスをはさんで、最終的に自分、また友達のことを、学んだ文法を使って説明するアクティビティにつなげた。全体的な流れとしては問題がなかったが、動詞の活用練習での辞書形と「ます」系の混同や、日本語とローマ字、英語の配置が悪いために、ワークシートが見にくかった。また、ワークシートで提示した単語が多かったことなどから、学習者が少し戸惑う場面が見られた。そのため、学習者が重要な所に焦点をしばれるよう、情報量の整理が特に初級レベルでは必要だと感じた。初めて習うことが多いからこそ、指導者が大事なポイントを絞って提示する必要がある。情報の整理と見やすさに配慮することの重要性を実感した。

補講日本語 1-1B における実習報告

楊 鶴

1. はじめに

本稿は、日本語教師養成プログラム、「日本語教育実践研究 I」において行った日本語教育実習で学んだ点、反省点および授業の感想を中心に報告する。

2. 実習概要

2016 年度、秋学期から実習のため、日本語教育実践研究 I（補講日本語 1）の授業に参加した。授業後には、授業で感じたこと、気づいたこと、および反省点を記述した。それに基づいて改善法を考え、次の授業に生かし、同じような間違いをしないよう工夫した。授業の概要を表 1 に示す。

表 1 補講日本語 1 の授業概要

| | |
|--------|--|
| 担当教員 | 今井新悟先生 |
| 実施クラス | 補講日本語 1-1B（木曜日・1 時限目） |
| 授業期間 | 2016 年 10 月～2016 年 12 月 計 10 回 |
| 使用テキスト | 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』vol.1: Notes（凡人社） 『わくわく文法リスニング』（凡人社） |
| 授業目標 | ひらがな、カタカナの獲得。あいさつから簡単な日常会話まで、初歩的なコミュニケーションができるようにする。学習者の発話頻度を高め、聞く、話すことを繰り返しながら簡単な文を理解でき、産出できるようにする。 |
| 学習者 | 30 人程度 |

3. 実習内容

補講日本語 1 の授業は、ディクテーションから始まる。それから、前回の授業の復習をしつつ、新たな文法事項を導入する。学習者の発話頻度を多くし、2～3 人でペアを組み練習し、発表する。一週間に一回の頻度でリスニングも行う。筆者は、10 回行われた授業の中で、まず、授業の最初に実施しているディクテーションを担当した。次に、毎回 10～20 分間の練習問題を担当し、最後に、授業一コマ分（75 分）を担当した。最後に担当した一コマ分の授業の実施内容を表 2 に示す。

表 2 補講日本語 1 担当授業：第 5 課（一コマ 75 分）

| 授業の流れ | 実施内容 |
|-----------|-----------------------------|
| 0 分～10 分 | ディクテーション：第 5 課の単語リストから 4 単語 |
| 10 分～25 分 | 動詞の「テ形」の復習：絵カードを使用 |
| 25 分～45 分 | 動詞の「タ形」の導入および「～んですか」の練習 |

| | |
|---------|---------------------|
| 45分～65分 | 「テ形」を使って「～てください」の練習 |
| 65分～75分 | わくわくリスニング 14：音声使用 |

4. 反省点および感想

4.1 ディクテーション

ディクテーションは、教師が各課の単語リストにある単語を読んで、学生に書かせるだけのものと簡単に考えていたが、実際の解答には、間違いにバリエーションがあった。例を表3に示す。

表3 ディクテーション回答のバリエーション

| 模範解答 | 学習者の解答 |
|--------|----------------------|
| ① カメラ | カミラ、カナラ |
| ② コーヒー | コヒ、コーッヒー |
| ③ コンビニ | コーンビニ |
| ④ ラジカセ | ラージーカーセー、ラーヅッカセ、ラジカセ |

筆者は、学習者を配慮し、聞き取りやすいよう遅く読んでみたり、長めに読んでみたりと工夫したが、逆に誤解を招いてしまい、解答に間違いを生じさせた。学習者は聞いたままを書いてしまうため、長く読めば「一」と書くし、発音中に間を置くと「ッ」を付け加えてしまう。その後、毎回発音には十分に注意し、読み上げた。その結果、ディクテーションのバリエーションも少なくなった。学習者は、教師の発音を正しいものとするので発音には十分注意しなければならないことを学んだ。

4.2 練習問題

「レストランで注文する」場面を想定したロールプレー練習では、最初の導入がうまく行かず、設問や登場人物の説明が不十分だったため、学習者はテキストを棒読みする形になってしまった。また、「～んですか」の意味を聞かれ、適切に答えることができず黙ってしまい、時間にロスがあった。この場合は、クラスの他の学習者に聞いてみたり、自分への宿題として次回しっかり答えると素直に言うことも大切だと感じた。学習者は学習意欲もあり、教師が気づかない細かいところまで拘るため、教師の説明より、学習者に説明させた方が理解しやすかったりすることがあることを学んだ。

ペア練習では、筆者も学習者とペアを作って練習した。筆者は学習者に対して、すぐに答えを与えたり、間違いを直したがる傾向があった。しかし、学習者同士のペアでは、すぐには答えを与えず、最初の音だけ言ってあげたり、ジェスチャーを使ったりと、相手の学習者自身にその単語を見つけさせようとしていました。学生を信頼し、自己修正させることも大事だと感じた。

5. おわりに

今回の教育実習において、教案通りにうまくいかないところもあったが、自信を持ってうまくできたところもあった。この貴重な経験を今後の日本語教育に活かしていきたい。

補講日本語 1-2B における実習報告

孫 芳兵

1. はじめに

本稿は、2016 年度秋学期日本語教育実践研究 I において、筆者が筑波大学 CEGLOC で実施された補講日本語 1-2B クラス(今井新悟先生担当)で行った教育実習について報告するものである。以下、授業と実習の概要、内容および反省について述べる。

2. 授業の概要および実習の内容

表 1 初級日本語 1 クラスの概要

| | |
|-------|--|
| 担当コース | 補講日本語 1-2B |
| 担当教員 | 今井新悟 |
| 実習期間 | 平成 28 年度秋学期 (10 月 3 日～12 月 21 日) 木曜日 2 限(計 10 回) |
| 受講者情報 | 10～20 名程度 レベル：日本語の学習経験がない学習者(多国籍) |
| 教科書 | ・わくわく文法リスニング ・Comprehensive Japanese Course Pack ・Situational Functional Japanese 1: Notes |
| 授業目的 | ・ひらがなとカタカナを読める、書けるようになること。 ・日本語で簡単な文を作れるようになること。 |
| 評価方法 | 期末テスト |

表 2 実習の内容

| | |
|-------|--|
| 実習実施日 | 平成 28 年秋学期 12 月 1 日 |
| 実習内容 | ・『Comprehensive Japanese Course Pack』 review L5 SD4 L5 SD5、6 ・『わくわく文法リスニング』 14 |
| 実習の目的 | ①動詞の活用を確認して、文の中でもうまく運用できるようにさせる。 ②「V んです」という文型を理解させ、運用できるようにさせる。 ③「V てください」という文型を理解させ、運用できるようにさせる。 |
| その他 | 教壇実習以外に、ディクテーションや練習など授業の一部を担当した。 |

3. 授業の内容

『Comprehensive Japanese Course Pack』の第 5 課の SD4 の復習と SD5・6 を担当した。「んです」と

「てください」の説明をし、学習者に練習させた。授業は 75 分で行った。

4. 実習授業の反省点

反省点は 5 点あげられる。まず、すぐ理解できない学習者やあまりできていない学習者への配慮が少なかった点である。クラス全員で練習する時間が長く、できていない人たちは授業を理解できていないと思われる。ペア練習にもっと時間を割り、わかっている人がわかっていない人に説明させたりするほかにも、学習者の反応を見て、理解していなさそうな人に当てて理解できたかどうかを確認すべきであった。学習者の反応を見ながら、教案の時間配分を柔軟に変更させ、学習時間と練習時間をつねに調整する必要がある。第二に、学習者に文型を練習させる時間が短かった点であり、「んです」と「てください」という文型を運用できるようにさせるという目標が達成できたかどうかわからない。第三は、授業で重点を置くべきところを間違えたことである。教案には「テ form」を復習する」と書いてあるが、授業では、完全に新しい知識として教えていた。第四は、板書が乱れてしまったという点である。板書について、よりわかりやすく教えるための板書や、「dictionary form」→「テ form」→「タ form」のような練習の手順の板書は不要であった。授業中に思いついたことは板書せず、板書する内容と板書の場所を予め決めておくべきである。そうすると、板書が乱れなくて済む。第五に、授業での用語や言葉遣いを改善すべきである。まずは用語を統一して使うべきである。前の授業で「テ form」を使ったので、今回の授業でも学習者を混乱させないように「テ形」ではなく「テ form」を使うべきであった。また、難しい表現を避けるようにすべきである。「…になりましたか」などのような文をより簡単な言い方に変えて授業をもっとわかりやすくする必要がある。

5. 終わりに

今学期の授業を通して、0 から初級の学習者の授業を近いところで観察でき、実際に日本語で教えることもでき、とても貴重な経験になった。その経験をこれからの日本語教育の中で活かしていきたいと思う。最後に、実習で丁寧にご指導くださった今井新悟先生に、ここで厚く感謝を申し上げます。

補講日本語 1-2B における実習報告

八巻 なごみ

1. はじめに

本稿では、2016 年度秋学期の「日本語実践研究 1」において、グローバルコミュニケーション教育センターの補講日本語コースで筆者が行った 10 週間の日本語教育実習について報告する。

2. 実習の概要

表 1 実習クラスの概要

| | |
|-------|---|
| 担当クラス | 補講日本語 1-2B |
| 指導教員 | 関崎博紀 |
| 実習期間 | 2016 年 10 月 7 日から 12 月 16 日 |
| 使用教材 | 『Situational Functional Japanese Vol. 1』 (以下、『SFJ』) 『耳で学ぶ日本語 わくわく文法リスニング 99』 |
| 実習概要 | 授業見学及び学習者のサポート／教壇実習 (2 回) |

3. 教壇実習の内容

表 2 教壇実習の内容

| | 1 回目 | 2 回目 |
|------|---|---|
| 実施日 | 2016 年 11 月 11 日 | 2016 年 12 月 2 日 |
| 使用教材 | 『Situational Functional Japanese Vol. 1』 | |
| 担当内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・『SFJ』第 3 課 <li style="padding-left: 20px;">↳ Conversation Drills-4・5 <li style="padding-left: 40px;">(以下、CD-4・5) | <ul style="list-style-type: none"> ・ディクテーション ・『SFJ』第 5 課 <li style="padding-left: 20px;">↳ Structure Drills-7・8 <li style="padding-left: 40px;">(以下、SD-7・8) |

1 回目の教壇実習では、『SFJ』第 3 課の会話を担当した。この課の場面設定はレストランである。CD-4 でモデル会話を用いた代入練習を行った後、CD-5 で 2 つのロールプレイを行った。ロールプレイ 1 では、教科書の場面設定である「喫茶店で飲み物を注文する」をより具体的な「Starbucks で注文する」に変更した。場面設定を変更した理由は、学習者に身近で具体性のある場面設定にすることで、実際の場面での運用につなげることができると考えたためである。ロールプレイ 2 では、教科書通りにリアルなメニュー表を使ったロールプレイを行った。

2 回目の教壇実習では、ディクテーションと『SFJ』第 5 課の文型導入と文型練習 (SD-7・8) を担当した。担当した文型は理由の「から」である。文型練習は、2 つの文を「から」を用いて 1 つの文にするもので、前件・後件を考えさせる練習を含んでいる。

4. 教壇実習の振り返り

4.1 1回目

まず、全体を通しての反省点として、指示の不明瞭さが挙げられる。授業の録画を見ると、ロールプレイの指示で学習者が戸惑っている様子が見られた。全体的に英語での指示が多く、不慣れな英語で自信を持って指示をすることができなかった。指示内容や質問対策などの綿密な事前準備が必要だった。また、授業中の指示も学習者にとっては貴重なインプットの機会であり、できる限り日本語で指示をすることも必要だと学んだ。

ロールプレイ 2 では、まず教科書で学んだ 4 つの場面 (①Entering and taking a seat、②Asking for the menu、③Ordering、④Paying) の会話を含めるよう指示し、モデル会話として教科書にある既習の会話を提示した。しかし、指示の不明瞭さに加え、教科書通りに会話することは学習者にとって難易度の高いことであったために、学習者を戸惑わせる結果となってしまった。教科書通りの練習をこなすことを目標とするのではなく、学習者の習得状況を考慮した上でロールプレイの内容を適宜アレンジすることが必要だった。

4.2 2回目

1 回目の教壇実習の反省から、2 回目の教壇実習では「媒介語の使用を最小限に抑える」ことを意識した。その結果、語彙コントロールのために仔細な教案を作成したことで、流れを意識しながら授業を組立てることもでき、余裕を持って授業をすることができた。

理由の「から」の導入では、まず学習者に向けて「皆さん、明日教室に来てください。」と言った。授業日が金曜日であり、土曜日に教室に来るのは不自然なことであるため、学習者から「どうして？」と理由を問う反応を引き出すことができた。ここで「テストをしますから、明日学校に来てください。」と言うことで、理由を言っているのだということを示すことができた。

反省点としては、授業のまとめとなる活動が不足していた点が挙げられる。「から」を使って自由に文を作らせる活動を取り入れることで、授業の効果的なまとめとすることができただろう。学習者が進んで「から」を使用したくなるような場面を教師が与えられることが理想的であったが、今回の実習ではそこまで力が及ばなかった。この点は今後の課題として、学習者にアウトプットの機会を与える手段を考えていきたい。

5. おわりに

2 回の教壇実習を通して、教案の重要性や、初級クラスにおいて直接法で授業を行うことのメリットを学んだ。今回の教育実習から学んだことを、今後の自身の教育活動へ活かしていきたい。

補講日本語 1-2B における実習報告

唐 欣然

1. はじめに

本稿は、2016 年度秋学期、筑波大学で実施した補講日本語 1 において、筆者が行った実習について報告するものである。以下はその実習の概要と実習から得た感想と反省を報告する。

2. 実習概要

| | |
|-------|---|
| 実習授業 | 補講日本語 1-2B (木曜日 2 限) |
| 担当教員 | 今井新悟先生 |
| 実習期間 | 2016 年 10 月 26 日～2016 年 12 月 15 日 (10 週) |
| 使用教材 | わくわく文法リスニング Situational Functional Japanese 1: Notes SFJ(Situational Functional Japanese) mini lesson 1～6 |
| 授業目的 | 平仮名と片仮名を書けるようになる 日本語で簡単な文を作れるよう、また、理解できるようになる |
| 学習者情報 | ゼロ初級の多国籍の学習者 前半の授業では 20 名程度の学習者、後半の授業では 15 名程度の学習者が参加した |
| 実習内容 | 11 月 24 日に 1 コマの授業を担当した 他の毎回の授業で、ディクテーションあるいはロールプレイあるいは練習の一部分を担当した 担当する授業以外では、資料準備と授業補佐をしながら見学した |

3. 実習の感想と反省

3.1 自分が担当した授業の概要

11 月 24 日一コマの授業を担当した。授業内容は、SFJ mini lesson の第 4 課の「場所を聞く」の復習と「SFJ」Tasks and Activities 2 の聞き取り練習とわくわく 13 の会話の練習という 3 部分であった。授業の目標は、①授業を通して、場所を聞くことができること。②ペア練習により、キーセンテンスを使って会話できること。③場所に関する内容を聞き取ることができるという 3 つの目標を設定した。

これらの目標を達成するために、教材の練習を使って、学習者にできるだけたくさん練習させた。練

習のバリエーションを増やすために、教材にある会話練習と聞き取り練習だけではなく、インフォメーションギャップを入れたオリジナルの練習を作ってみた。

3.2 自分が担当した授業についての感想と反省

11月24日の授業を通して、指導教員からの指摘をもとに、反省と感想を以下のようにまとめる。

- ① 声が小さかったことがこれから注意しなければいけない。
- ② 教師側の発話の内容を常に注意しなければいけない。第一、フィラーの使いすぎという問題を心かける必要がある。たとえば、「で、二番は～」という発話は初級学習者にとって、「でにばん」にしか聞こえないので、意味が理解できないのだろう。第二、難しい言葉を使わないように注意すべきである。例えば、「音声」という言葉を避けて、「音」に変えた方がいいと思われる。
- ③ 教師のやり方によって授業の効果が変わってくる。まだ未習の内容を避けて、難しい内容にこだわらないほうがいい。そこは、教師側が役割を果たすべきところである。まだ未習のことを何度も聞かせてもわかるはずがないので、これらの表現を直接聞き取れる内容に変えて、教師側が話して理解させる。
- ④ 常に学習者の反応をチェックすることが重要である。学習者の反応をチェックするために、もう一度答えを言わせる方法が有効である。また、一人の学習者が間違えたこと、あるいは疑問を持っていることについて、必要があれば学習者全員の前にシェアして、また確認する。

4. 見学を通しての感想

今学期の実習の学習者がゼロ初級であるため、できるだけ少ない媒介語を使って授業を完成させることが工夫すべきところであると強く感じた。教師側が主役ではなく、学習者が主役であることを常に念頭を置く必要がある。学習者を主役にさせるために、教師側が一方向的に教えるではなく、学習者の勉強する意欲を引き出し、たくさん練習させることが重要であると思われる。そこで、ペア練習が有効だと思われる。ペア練習を通して、学習者がお互いに問題を発見し、あるいは、自己修正を行うことなどが期待される。

5. 終わりに

今回の実習を通して、初めて教壇に立ち、非常に多くのことを学ぶことができた。特に初級学習者に向けた日本語授業での授業運営、教案作成、授業を行うための技術などを体験することができた。最後に、実習で丁寧にご指導くださった今井新悟先生に感謝申し上げます。

補講日本語 3-2B における実習報告

呉 楊

1. はじめに

本稿は、日本語教育研究コースの必修科目「日本語教育実践研究Ⅰ」の一環として 2016 年度秋学期に実施された「補講日本語 3-2B」のクラスにおいて、筆者が見学および実習を行った報告である。以下に、クラス・実習の概要、実習の感想および反省点について報告する。

2. 実習クラスの概要

春学期にブッシュネル・ケード先生の授業を毎週見学し、授業の仕方や学習者とのインタラクティブ・ティーチングを学んだ。教壇実習は秋学期の前半と後半で 1 コマずつ担当し、前半の授業を反省した上で後半に再び授業を行う形式で進めた。教壇実習の内容は主に、新出単語の復習や基本的な文型の説明、会話ドリル、タスク活動などである。

表 1 クラスの概要

| | |
|------|--------------------------------|
| 担当教員 | ブッシュネル・ケード |
| クラス | 補講日本語 3-2B |
| 授業期間 | 秋学期 B モジュール (10 週間) 毎週金曜日 2 限目 |
| 受講者 | 17 人 (多国籍) |
| 使用教材 | 『わくわく文法リスニング』/SFJ Lesson13-18 |

表 2 実習の概要

| | 1 回目 | 2 回目 |
|-------|------------------------------------|--------------------------------------|
| 実習日時 | 2016 年 10 月 21 日 (金) 2 限目 | 2016 年 11 月 18 日 (金) 2 限目 |
| 担当内容 | わくわく 52/SDQ クイズ SFJ L14NW、SD789 | わくわく 52/ SDQ クイズ SFJ L16 NW、SD789 |
| 実習時間 | 1 コマ 75 分 | 1 コマ 75 分 |
| 実習の内容 | 授受補助動詞の使用 可能形の復習 | 形式名詞「の」と「こと」 意志形の復習 |

3. 実習の感想および反省

春学期の授業見学を通して、日本語授業に関する従来の考え方が変わった。今までイメージしていた日本語の授業は、単語と文法が中心に導入され、「話す」というよりも「書く」の方が重視されるものであった。一方、担当教員の授業では、「話す」能力を鍛えることがより大切であるという考えに基づいている。具体的には、授業中には会話練習を多く取り入れ、かつ、日常会話の話題を目標文法や会話

練習と関連づけて導入していた。それにより、学習者が日常生活に活かせる会話を授業で身につけることができる。さらに笑いも取り入れられ、朗らかな雰囲気の中で授業が行われていた。

教壇実習のビデオを振り返ると、以下の4つの反省点が挙げられる。

(1) 授業中にタスクをちゃんと説明するように意識したが、逆に説明が多すぎてしまった。説明しすぎると、学習者の練習する時間が少なくなるというデメリットがあるが、タスクをちゃんと説明しないと、学習者が指示通りに練習できないかもしれないという懸念があった。直接言葉で説明するよりも実際に例を挙げて見せると、学習者にはよりわかりやすくなるというアドバイスを受けた。2回目の実習を行う前には、指示内容や台詞を考えておいたため、例を挙げながら指示の内容が簡潔に伝わった。それにより、指示する時間を短縮でき、練習時間を確保することができた。

(2) いくら楽しい授業が作りたくても、新米の教師が簡単に成功するわけではない。文法項目を導入するとき、学習者が飽きてしまう場合が多いため、楽しめる授業を行うのは大切だと考える。春学期の見学を通し、日常生活で実用できる事例を活用して楽しい授業の雰囲気が作れるように心がけた。しかし、実際授業を行うと、学習者の興味を引いたり、楽しめる授業を進行するのは簡単なことではないと実感した。したがって、授業外でも学習者とよく接触し、何度も教壇を立てて練習すれば、自然に楽しい授業が作れるのではないかと思われる。

(3) ビデオで実習を振り返ることで、板書の誤りが発見できた。1回目の授業では「てください」「てもらえませんか」「ただいただけませんか」という依頼表現の丁寧度をよりわかりやすく説明するために、黒板に矢印を書いて丁寧さの度合いを示した。しかし、板書する際、矢印の方向が逆になっていた。授業中、そうした問題点に全然気づかなかったが、反省会でブッシュネル先生に指摘していただいた。ビデオに記録した教師の動きや話し方、学習者の反応などのことを気づき、その対応方法を考えて書き留めておくと、授業後での反省に役に立つと感じた。

(4) 授業の内容によって時間の配分を決めた方がよいと考えられる。文法項目の中で、学習者にとって優しい項目もあれば、難しい項目もある。今回の教育実践で、一回目の学習項目である動詞の授受補助動詞は習得しにくい内容であったため、時間的にはあまり余裕はなかった。それに対して、2回の内容は「の」と「こと」、つまり動詞句を名詞化する形式名詞が学習項目であったため、本授業が終わっても10分の時間が残った。そのような余った時間で前の課題を復習したり、自作資料をやらせたりすることができるが、実際の実習で時間を有効利用できなかった。今後は、授業の内容と学生のレベルを配慮した上で時間を配分しなければならない。また、臨機応変に対応できるように、練習素材をしっかりと用意しておいた方がよいと考える。

4. おわりに

今回の実習は、筆者が日本国内で初めて教壇に立ち、日本語教育を行った経験であり、日本語教師としての貴重な経験になった。実際に教室で教えてみると、予想以上に難しいことに気付いた。特に、楽しい授業の達成と授業中の時間配分に関しては、もっと工夫する必要があると思われる。実習後の反省会で担当教員からアドバイスをいただき、成長につながった。実習で丁寧に指導して下さった担当先生と補講日本語 3-2A クラスの皆さんに、心からお礼を申し上げたい。

補講日本語 3-2B における実習報告

関 玲

1. はじめに

本稿では、日本語教師養成課程の必修科目「日本語教育実践研究 I」において、筆者が補講日本語 3 のクラスで行った日本語教育実習について報告する。

2. 教育実習の概要

ブッシュネル・ケード先生が担当の「補講日本語 3-2B」は日本語学習者約 20 人を対象に、春学期の月曜日から金曜日まで毎日開講されていた。筆者はそのうちの 2 回の授業で実習を行った。この授業では『Situational Functional Japanese Vol.2 Drills』（以下『SFJ』）という教材を使用していた。教育実習で筆者が担当していた授業は『SFJ』の Lesson14「忘れ物についての問い合わせ」の Conversation Drills と Lesson16「電話をかける (2) タクシーを呼ぶ」の Conversation Drills の部分であった。以下の表 1 は教育実習で担当した授業の概要をまとめたものである。

表 1 教育実習の概要

| | 1 回目 | 2 回目 |
|-------|---|---|
| 実習日 | 2016 年 10 月 25 日 | 2016 年 11 月 22 日 |
| 実習内容 | 忘れ物についての問い合わせ | タクシーを呼ぶ |
| 授業の目標 | <ul style="list-style-type: none"> 忘れ物について問い合わせることができる 忘れ物を描写することができる 電話を自然に開始すること及び終了することができる | <ul style="list-style-type: none"> 電話でタクシーを呼ぶことができる タクシー運転手に自分の行きたいところを伝えることができる 道順を案内することができる |
| 教具 | PPT、財布、紙袋、本、傘 | PPT、手書きの地図 |

3. 教育実習を振り返って

3.1 教案作り

今回の実習で担当したテーマ「忘れ物についての問い合わせ」と「タクシーを呼ぶ」はいずれも日常生活に近いテーマであり、教案を作る際に以下の点を考慮に入れた。

第一に、上記の 2 つの場面において、実際の生活の中でどのような会話が行われるかを考慮し、教材にないものを付け加えた。例えば、「忘れ物についての問い合わせ」の課では、会話の最後に教科書にない「お礼を言う」部分を付け加えた。第二に、モデル会話を導入する時に、学習者になぜその会話をするかを理解させるように工夫した。例えば、「忘れ物」の課では、「紙袋」について説明する会話があり、その「紙袋」の色だけではなく、中身に何が入っているかと「紙袋」の特徴が説明できるように会話を導入した。学習者に「なぜ」その会話をしなければならないかについて理解させれば、その会話の流れ及び内容を覚えやすくなると思った。このように、教案を作成する時に、教材にある会話をそのま

ま学習者に覚えさせるだけではなく、なぜその会話をするか、また状況に応じた会話ができるように教案を考えた。第三に、学習者に学習したことを練習させるために、会話のロールプレイの時間を必ず設けるようにした。また、ロールプレイの内容を充実させるために、手書きの地図などを利用し、学習者になるべく多くの場面を想起させ、練習の工夫を取り組んだ。

3.2 教育実習から学んだこと

今回の教育実習実習を振り返ってみて、日本語を習得させるための有効な手段と改善点を以下に述べる。まず、有効な手段として、学習者とのコミュニケーションの重要性、教材として実物の利用、視覚的のわかりやすい資料の作成の3点を挙げることができる。

1 学習者とのコミュニケーションの重要性

授業中に教師からの一方的な説明ばかりではなく、学習者に「～ってわかる?」「～って知っている?」と質問をかけたり、学習者がうまくできたところを「素晴らしい」「よくできました」とほめたり、そしてあまりできなかったところを「そこはちょっと違いますよね」とさらに説明したりすることを通して学習者とコミュニケーションを取り、学習者の授業への参加意識を向上させた。

2 教材として実物の利用

財布、紙袋、手書きの地図などの実物を用意し、教材にあるモデル会話だけではなく、実物を利用し、学習者にもその場で会話を作ってもらった。こういった練習を通して、学習者の運用能力を授業中に確かめることができた。

3 視覚的にわかりやすい資料の作成

モデル会話の文字だけではなく、会話の状況を表すイラスト及び強調したいポイントなどをパワーポイントを通して示し、学習者の興味を引き付けることができた。

上記の有効な手段に対して、今回の実習の改善点として、学習者の実際の学習状況・学力の把握の不十分さと時間配分のバランスの悪さの2点を挙げたい。今回の実習は飛び入り教育実習ということもあり、学習者の実際の学習状況・学力を十分に把握できなかった。そのため、授業の教師による講義と学習者による会話練習の時間をうまく配分することができなかった。今後、学習者の学習状況・学力を事前のテストなどを通して把握するように心掛けたい。

以上は今回の実習を通して学んだことである。今後日本語の授業を担当する際に、上記の3つの有効な手段を授業に取り組み、また、学習者の学習状況・学力を事前に把握し、学習者のレベル・需要に応じた教案を作成し、実践していきたい。

4. おわりに

本実習を通して、日本語学習者に実際の生活で使用できる会話を身につけさせることの難しさと面白さを多少知り得たようになったと思う。実習が始まる前にブッシュネル先生から「授業を楽しめればよい」という一言をかけられ、教科書にこだわらず、実際の生活場面にあった会話を学ばせようと教案を作成し、実習を行った。この実習の経験を今後の研究及び将来の仕事に活かしていきたい。

総合日本語 1B における実習報告

章 志 鵬

1. はじめに

本稿では、日本語教育学学位プログラムの必修科目「日本語教育実践研究 I」において、筑波大学グローバルコミュニケーション教育センターで実施された初級日本語学習者を対象とする「総合日本語 1」のクラスで、筆者が行った教育実習について報告し、自己評価を記す。

2. 授業の概要

表 1 実習クラスの概要

| | |
|-------|--|
| 授業期間 | 平成 28 年度秋学期 A・B・C モジュール 計 15 回 |
| クラス情報 | 総合日本語 1B 初級クラス |
| 担当教員 | 小野正樹先生 |
| 教材 | (1) 初級日本語 L1-8 (2) SFJ Vol.1 Note (3) わくわく文法リスニング (4) テーマで学ぶ基礎日本語 Vol.1 |
| 受講生 | 多国籍 初級日本語学習者 25 名程度 |
| 授業目的 | ひらがなとカタカナが読めることから、あいさつや買い物、簡単なコミュニケーションができること、あるテーマについて日本語で書いて、発表できること |

3. 実習内容

表 2 教壇実習の内容

| | 一回目 11 月 18 日 | 二回目 12 月 2 日 | 三回目 12 月 9 日 | 四回目 1 月 20 日 |
|------|------------------------------|------------------------|------------------------------|--------------------|
| 実習時間 | 75 分 | 75 分 | 75 分 | 75 分 |
| 授業内容 | わくわく L12、13 L4 SD3-4 文型練習 | ビデオ確認 L5 SD1-3 文型練習 | わくわく L15、16 L5 SD6-8 文型練習 | ビデオ確認 L7 ロールプレイ |

- ・『わくわく文法リスニング』を用い、音声を聞き、復唱する形式で、聴解練習をさせる。
- ・各課のビデオを見せて、重要表現を取り上げて確認する。その後、音声に従って復唱させ、話す練習をさせる。
- ・新出文型の意味を説明したり、練習問題を完成させたり、新しい文を作らせたりすることを通し、新出文型を練習させる。
- ・グループに分け、授業で学んだ文型と会話を使わせ、ロールプレイをして、学習内容を復習する。

4. コーラス練習の効果と自己評価

今回の実践では、コーラス練習を意識的に取り入れた。次に先行研究をあげながら、教壇実習で観察したコーラスの効果をめぐる、自己評価を記述したい。

志水 (2003) では、復唱 (本稿では「コーラス」と称する) の機能が述べられ、また脳科学の視点から検討された。まず、復唱練習には、

- ① 安心して話すことができる雰囲気作りにつながっている
- ② 学生の聞く力と話す力を育てることができる
- ③ 声を出すことを通して、発言の意味の明確化や概念の共有化を図ることができる
- ④ 学生自身が間違いや「ずれ」に気づくことができる

という4つの有効な点がある。脳科学と認知心理学の視点から見れば、学習した内容を音にし、出力することで学習内容への理解が進み、学習効果が生じるということである。音声的言語によって脳が活性化するとも言われている。また、繰り返し学習の一つの方法として、学習した内容を定着する効果もある。さらに、学習者にとって思考の表出でもあり、自己吟味を促したり、補完、焦点化、確認、共有をもたらしたりすることもできるとも述べられている。今回の実践で、学習項目を全員でコーラスし練習させる授業活動を意識的にを行い、効果を観察してみた。

まず、コーラスの中で練習への参加度が高くなり、授業の雰囲気も盛り上がった。普段あまり話さないが、積極的にコーラス練習に参加する学生もいた。安心した雰囲気が作られ、学生の学習意欲が高められるためであると考えられる。また、声を出して、学習した項目を即時的に復習したため、授業内容がはやく定着し、文型練習の正答率も達成度も高かった。もちろん、学生の発話には、誤るところも時々あった。その時、すぐフィードバックし、間違いやすい問題点も特に取り上げて、クラスで共有し、注意を払わせた。さらに、教師が学習項目を説明し、確認する段階より、コーラス練習の段階は学生からの質問が多かった。この状況から見れば、コーラス練習では、考えたことを声にすることを通して、学生が勉強した項目を再び吟味し、疑問を持つところを見つけたと考えられる。学習項目を教えて覚えさせるだけではなく、思考させるのも授業の重要な目標ではないだろうか。

一方、授業を振り返ると、不十分な点も存在する。コーラス練習を中心としたため、個々の学習者の状況を観察することができなかったことである。例えば、積極的に質問してくる学生に答えられるが、恥ずかしく思って聞かない可能性もあるので、そのような学生に対する気配りが十分とは言えなかった。質問をそのまま残さなければ、実際の使用で失敗する恐れがあると思われる。また、なかなか声を出さず、コーラス練習をしない学生もいた。もちろん、直接に名指す、あるいは笑顔を与えて誘導するなどの活動を取って、練習させようとしたが、時間の原因でいつもこのようにすることができず、その学習者にとって練習機会がなくなつたと考えられる。最後に、文型練習では、学生に考える時間を十分与えなかった。その結果、考える途中、もしくは考えていない学生が、ただ他人に従って復唱していたため、個人の大切な思考機会が無視された。そのため、コーラス練習の方法を改善し、学習者の様子をよく観察しながら、全員の練習機会を重視し、学習意欲を保つことが、今後の課題と認識している。

5. おわりに

今回の教育実習を通して、筆者が教案を作成することから実際の授業を行うことまでの完全の授業の流れを体験した。とても貴重な経験である。しかし、それと同時に、自分の不足も実感した。今後は、これらの経験をさらに活かし、一人前の日本語先生になるために頑張りたいと思う。最後に、実習で丁寧に指導くださった小野正樹先生とクラスの学生達に、心からお礼を申し上げたい。

参考文献

志水廣 (2003) 「授業においてなぜ復唱法は大切なのかー脳科学の視点から復唱法を考えるー」『イブシロン』45号, 33-42.

総合日本語 2B おける実習報告

松田 里沙

1. はじめに

本稿では、筑波大学人文社会科学研究所日本語教師養成プログラム必修科目「日本語教育実践研究 I」にて筆者が行った教育実習について、内容の報告と自省的な考察を行う。

2. 実習の概要

2.1 実習クラス

本実習は、「総合日本語 2B」(担当教員:小野正樹先生)にて秋学期 ABC モジュール(2016年10月~2017年2月)に行われた。本クラスは3人の教員がチームを組み、交代制で担当している。授業内容のスケジュールは事前に決められており、教員は互いに進捗状況を確認、調整しながら授業を行う。

クラスのレベルは、「日常的で具体的な話題についてコミュニケーションできること、あるテーマについて日本語で書くこと、あるテーマについて発表できること」を学習目標に掲げ、初級後半の学習者を対象としている。教科書は文法、会話教材として『Situational Functional Japanese Vol.2 (以下 SFJ)』、副教材としてリスニング用に『わくわく文法リスニング』、作文用に『A New Approach to Elementary Japanese Vol.2』が指定されている。今回の受講者は14人で、多国籍の学生によって構成されていた。

2.2 実習内容

今回、教壇実習として7回授業を受け持った。各授業の概要を以下の表に示す。

表 実習の概要

| | 実施日 | 主要内容 | |
|-----|--------|---------------------------------|--------------------------|
| 第1回 | 11月1日 | SFJ Lesson11-2 本を注文する | モデル会話のストーリーテーリング・新出文法の説明 |
| 第2回 | 11月22日 | SFJ Lesson12-4 道を尋ねる/案内する | モデル会話のストーリーテーリング・会話練習 |
| 第3回 | 12月13日 | SFJ Lesson13-4 理由をつけて謝る、人の紹介 | モデル会話のストーリーテーリング・会話練習 |
| 第4回 | 12月20日 | SFJ Lesson14-1 V-可能形と~できる | モデル会話のストーリーテーリング・新出文法の説明 |
| 第5回 | 12月27日 | SFJ Lesson14-4 電話の問い合わせの仕方 | モデル会話のストーリーテーリング・会話練習 |
| 第6回 | 1月24日 | SFJ Lesson15-5 久しぶりに会うときの挨拶 | モデル会話のストーリーテーリング・会話練習 |

| | | | |
|-----|-------|-------------------------------|----------------------|
| | | 引用表現「～と言っていた」 | |
| 第7回 | 1月31日 | SFJ Lesson16-4 提案、場所や道順の説明 | モデル会話のストーリーテリング・会話練習 |

1 課につき 5 回分の授業を充てて文法、会話の練習を行う。流れは以下の通りである。

- 1 回目：モデル会話を視聴しその課の学習内容を理解させる、新出文法を確認する
- 2 回目・3 回目：新出文法の練習問題を解く、その文法事項に合ったリスニングを行う
- 4 回目：再度モデル会話を視聴しストーリーテリングを行う、会話の練習問題を解く
- 5 回目：会話の練習問題を解く、ロールプレイを行う

本クラスは予習型の授業形式を取るため、授業中に文法を子細に説明することはなく、学習者の自学学習に拠って成り立つという特徴がある。またストーリーテリングやロールプレイなどのグループワークで机間巡視をして学生の活動の補助を行うことも多かった。

上記の実習のほか、期間中に中間テスト、期末テストが行われ、その採点補助も実習の一環として行った。そこではテストの形式や採点基準について学ぶことができた。

3. 反省点

本実習では文法項目を一から教えるというより、会話や状況を理解させる方に重点を置く回が多かった。しかしそれでも、学生の質問で細かい文法の違いについて聞かれることがあり、会話練習の担当であっても文法指導の知識が重要であると感じた。

また教壇実習の中で、一貫して「話し方」について注意してきた。ティーチャートークはフォリナートークの一種として第二言語習得の研究対象とされているが、実際の教育現場では担当する学生の既習文法や語彙の知識が必要であり、単純に話し方を変えるだけでは上手くいかない。話し方について意識してみると、普段いかに言葉の選び方、質問の仕方を曖昧にしてきたかが明確になった。特に質問については、発言の最後を濁すことや、意図がはっきりしない質問をしてしまうことが自分の癖になっていることを自覚できた。こうしたティーチャートークに関する意識は、基本的でありながら授業において非常に重要であるということを確認することができ、大きな収穫となった。

参考文献

- 伊藤早苗 (1998) 「初級日本語クラスにおけるティーチャートーク：教師の質問はどのような学習者の発言を引き出しているか」 『北海道大学留学生センター紀要』 2、pp.103-115.
- 岡崎敏雄・長友和彦 (1990) 「日本語教育におけるティーチャートークーティーチャートークの質的向上に向けて」 『広島大学教育学紀要第二部』、39、pp.241-248.

総合日本語 7 読む書く B における実習報告

山口 真葵

1. はじめに

本稿は、日本語教師養成プログラムの必修科目である「日本語教育実践研究 I」において、「総合日本語 7 読む書く B」のクラスで行った実習授業についての報告である。

2. クラス概要

表 1 クラス概要

| | |
|-------|---|
| 担当コース | 総合日本語 7 読む書く B |
| 担当教員 | 木戸光子先生 |
| 実習期間 | 2016 年 10 月 3 日～2017 年 2 月 8 日 |
| 学習者 | 8 名 (J7,J8 レベルの日本語上級学習者) |
| 授業概要 | 記事要約／文章(新書・文庫)の読解／作文 ① 読解 1 新書「言葉で相手を気遣うかどうか」／②作文 1 読解 1 をもとに作文／ ③読解 2 インタビュー「フィギュア企画開発 澤山みを」／④作文 2 上記の読解をもとに作文／⑤読解 3 小説「しのぶセンチの上京」／⑥作文 3 読解 3 をもとに作文 |

3. 実習内容

私が実習として授業を担当したのは表 1 の「作文 3」である。2 回に分けて授業を担当し、1 回目の授業では作文を書くためのウォーミングアップと読解の理解を確認するための活動を行い、作文の宿題を出した。2 回目の授業ではよりよい作文にするための話し合いと修正活動をペアになって行った。「読解 3」で使用した推理小説を教材として用い、登場人物それぞれの視点からあらすじをまとめ、感想を書くという課題を与えた。課題の目的は「登場人物の立場から論述することを通して、視点の統一を学ぶこと」である。

表 2 実習概要

| | |
|-------|---|
| 実習日 | 12 月 22 日 (木) 1 限目 (うち 9 時 5 分から 9 時 55 分の 50 分間) |
| 授業概要 | ・読解の理解の確認を行う ・登場人物の中から一人を選び、その人の視点からあらすじを時系列にそって箇条書き |
| 授業目標 | 登場人物一人に視点を固定して書く方法をマスターすること |
| 授業の流れ | 1 登場人物の特徴と人間関係の確認 (学習者に質問をしながら) |
| | 2 例を用いて一人の立場から書くということを具体的に説明する |

| | |
|------|---|
| | <p>(同じ内容を二人の登場人物の視点から書いた文を用意し、視点に注意を置くべき表現(「受け身」「授受」「いく・くる」)の部分に穴埋めにした問題を解かせることで「視点」とはなにかの説明をする)</p> <p>3 ペア活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各章のあらすじを簡単に説明した文の空欄部分を埋めながら読解の確認 ・登場人物の中から一人を選び、その人の視点からあらすじを時系列にそって、箇条書きにしていく。 <p>4 宿題の説明：授業での活動を参考にしながら、一人の登場人物の立場からあらすじをまとめ、選んだ登場人物に対する感想を書くよう指示する。</p> |
| 使用教材 | 東野圭吾(1995)「しのぶセンセの上京」『しのぶセンセにサヨナラ 浪速少年団・独立編』講談社/活動のための授業プリント(作成)/視点について図示したプリント(作成) |

| | |
|-------|--|
| 実施日 | 1月12日(木)1限目(うち9時10分から9時55分の45分間) |
| 授業概要 | ペアを組んでお互いの作文について指摘しあうピア活動をおこなうこと |
| 授業目標 | 学習者同士、お互いの作文を修正しあうことで視点を固定して作文する力を向上させること |
| 授業の流れ | 1作文の宿題に関するコメント 2作文修正のピア活動(視点に注意しながら) 3作文の発表 |
| 使用教材 | 学習者が書いた各々の作文/東野圭吾(1995)「しのぶセンセの上京」同上 |

4. 学生の反応と作文からみる視点の一貫性に関して

1回目の授業で、上記表2の授業の流れの2の活動を行った際、文法事項として「受け身」や「授受動詞」はきちんと理解しているということがわかった。しかし、異なる立場の人物から同一状況を述べたとき、視点の変化による「ていく・てくる」の使用の変化や授受補助動詞の使用についての認識があまりできていない様子であった。しかし、教師による視点のちがいについての説明を受け、理解した様子であった。その後のペアワークでは、視点と表現に注意してお互いに確認しながら行うことができていた。宿題は、登場人物の中の一人の視点からあらすじをまとめる課題をだした。数人の学習者は、登場人物の視点で書くのではなく、登場人物になりきって作文を書いていた。こちらの意図した作文ではなかったが、視点の習得を目標とした作文の授業を行う上で、一つの過程として「なりきり作文」を行うことは意義のあることであると思った。また、授受の補助動詞の使用や「ていく・てくる」の使用により、他の人物を主語としながらも、視点の統一がきちんと行えている作文を書くことができていた。また、学生の作文から「視点」と「ようだ・そうだ」といったモダリティ、「すると」といった接続詞とのかかわりから指導を行うことの必要性もみえてきた。多角的な観点からの指導が必要であると考え、学習者の反応や作文から、今回の授業では「視点の一貫性」に関して適切な理解が進み、使用につながれたと思う。

総合漢字 6B クラスにおける実習報告

岩崎 透

1. はじめに

本稿では、日本語教育学学位プログラムの必修科目「日本語教育実践研究1」において、授業に実習生として参加し、授業の流れ、自身が取り組んだレアリアを活用した教材について報告する。

2. 実習概要

表1 実習概要

| | |
|--------------|---|
| 実習授業・教員 | 2016年度秋補講・総合漢字6Bクラス・加納千恵子先生 対象：漢字600字～800字を知っている学生。 目標：中級漢字1000字程度の読み書きと総合的な運用力をつける。 |
| 実習期間 | 2016年10月3日(月)から2017年2月6日(月)まで |
| 使用教材 | 『Intermediate Kanji Book』vol.1 (凡人社) 同教科書 Lesson6～10 準拠の問題集(宿題)の冊子 |
| 学生数 受講者情報 | 11名(最終的に諸般の事情で帰国者1名がでたため10名) 漢字圏学習者5名・非漢字圏学習者6名(最終5名) |
| 実習担当授業 | 秋学期授業のうち、宿題のフィードバックの授業45分を3回担当した。 〈第一回〉10月31日(月曜日)・第六課 〈第二回〉11月21日(月曜日)・第七課 〈第三回〉12月19日(月曜日)・第八課 |
| 評価方法 | レベルチェックテストをうけること、各課のクイズと期末テストを受けること。 宿題を期日までに出すこと。 宿題(10%)、クイズの平均(30%)、期末テスト(60%) |

3. 授業の流れ

学期初めにオリエンテーションとレベルチェックテストを実施し、最終的に残ったメンバーに対し以下①～③を課ごとに実施した。

- ① 『Intermediate Kanji Book』をもとに導入・基礎練習、宿題配布。
- ② 授業開始時に宿題を回収。授業では応用練習を実施し・授業最後に配布プリントを基にペア・リーディングを実施。
- ③ クイズ(リスニング及び筆記の確認テスト)実施後、宿題のフィードバック。

4. 教壇実習の内容、工夫した点と反省点

実習開始の学期の前に、各課の宿題の「ボーナス問題」部分に相当する問題を担当教員の指導の下で作成し、各課の宿題配布時に添付し、宿題のフィードバック時に内容を指導するという形で教壇実習を実施した。

表2 本実習において添付したボーナス問題の一覧

| | |
|----------|---|
| Lesson6 | 地図や見取り図の接尾辞が使われている漢字を探す（レアリアを活用） 接尾辞を活用して学習者のよく知っている建物の見取り図を書く |
| Lesson7 | ポスターに使われている副詞的に使われる漢字を探す。（レアリアを活用） ・書き換え問題・自作のポスター作成 |
| Lesson8 | 雑誌の表紙などの様々なメディアに使われている複数の読みがある漢字（レアリアを活用）複数の読みを絵とともに書く |
| Lesson9 | ・同訓間違い探し ・漢字クロスワード |
| Lesson10 | ・画像を活用した同義語の使い方（レアリアを活用） ・画像を活用した類義語の使い方（レアリアを活用） |

宿題を回収してから、誰がどのような間違いをしたかポイントを整理し、宿題のフィードバックを行う際の教案に可能な限り反映させた上で教壇実習を行った。また、最後の教壇実習においてはPPTを活用した点も工夫した点である。教材の作成から授業の方法に至るまで、一貫して学習者の興味関心を引けるような内容を心がけた。

一方、反省点としてあげられるのは、教壇実習においては学習者と可能な限りコミュニケーションを取りながら行おうと意識していたものの、積極的に発言する学生とばかり話してしまうことが多く、バランスよく全ての学習者とコミュニケーションが取れなかったことである。この点を反省し、今後の授業における課題として取り組んでいきたいと考えている。

5. おわりに

本実習ではボーナス問題の作成や、フィードバックの部分を担当させてもらえたことで、細かく間違いをチェックし、学習者一人ひとりと向き合うように教案を作成する機会が得られた。その結果様々な視座を得ることができたと思う。ボーナス問題の作成から授業の進行に至るまで、多くの時間を割いてご指導いただいた加納先生と熱心に学習に取り組んでくれた総合漢字6の学生達に感謝の意を表したい。